青山御流
活花手引種前篇　二

二之巻凡例

○此冊と三の巻ニハ初心の為挿花の体を甚悉くし各々図し
其枝葉をしほる形を得て花葉並へなり左右合考して
茎の長短浅深高下を考ふへし

○花實草木春秋の次第をもて順をなし次されども大凡乃ち
にして時候の遅速にかゝはらず次

○倭漢異名方言の類つらひにあるハ混して却て
繁雑なるへし故に耳遠く聞き嫌ましきハあるハ次出さす
遠く稀なるもの同名異物の類と倭名漢名の次第と
撰て次十に二三をあぐる次

梅

白梅
山茶花
ツバキ
海石榴ーモ
以下通用ニ随テ椿字ヲ用

図のごとく何程風情おもしろくとも茎器をよく知りてこそ悪しき
ことは猶も直すまじく候し添も此をあまりて添ふるに
よく候しあらば添のなくしを考べし

梅

福壽草

元日草トモ
報春草トモ

如此茎の枝をきよい（氣條）とのなじをうけて入置し
あるは福壽草を取りて添とのみにて於趣をなすなるべし

かくのごとくなる柳は志げり過ぎ
枝は伸びるべく悪し
なと左の事縄しと考ふべし

青柳
つばき

かく柳の枝もきらし
つばきもつまずに入るべし

かく茎たひゐして葉なき梅ハ何にても花と葉のかそりに
みぎに引つけて生なりまさらし添に添く生る枝本末
在さきにこられえへて宜し
いつも一方へ見るべし

辛夷（こぶし）まてこぶしも

木筆トモ
望春トモ

かく梢のさし出たる枝を除きつぼみのところ添をしんとして
横に出し花ひらきたるを手りて葉を揉め[illegible]に
そく宜し但生花にハ手ろさらぬも好なり

桃（もゝ）

仙果花（せんくわ）トモ

おく山かのほとりにちめちんふそくとく生べし餘り小枝ハ添けく
つきすぎるハ悪し此外ひなのこゝろ
かはこれに准べし別体異を免し

かくなるひともと出たる
ちとは何ほど次枝までを
あらしてかろくとおほしく出へし
ことにかさねつるへなるの上枝は大ひなる
時は器のこけんをそおほつかなし
花のましとなるへし

蘭も葉組あれ
て悪し

垂絲櫻（シダレサクラ）
垂絲海棠トモ

春蘭
獨頭蘭トモ

かく枝をたをやかにして
風情よくひとつにみゆるほと
余情ふかし

蘭も上下のまとをつけて出へし
なかと茎葉のこゝろへあり

かくのごとき花ハ中の枝伸ていろき
まゝ水際をまとふて差し
出して山ぶき卯の花
金糸梅金糸桃の類ハ
とかく其のまゝを以て
入るべし

小毬（コテマリ）
繍團花ナリ
方 こでまりとも
こゞめ花とも

如斯中より出たる長き枝を
ちゞめてへく水際をひきく
差し中より短き萩
大きなりかなと云ふ
なるべし

山
棣棠ナリ
酴醿花トモ

そろもありていづれか合て出るとはなけれどもおく表裏ある
大葉などは陰陽のちがひをたゞし葉を指しもなくとく組べく
悉くしおく作もかくさる右にかへる葉と出るは悪しき此図を考べし

大葉蘭
ヒトツ葉蘭トモ

図のごとく一方を伸ば一方を縮めて入るしまた陰陽も
かくのごとく組合しこれをかりに二株組といふなり左右曲直
又浮俯仰時宜に随ふべし其にかへしなどと此図をよくよく考へて

右是ハ風情ハおもしろけれども表裏のくばり
悪しくまゝ一体もあるゆへ悪くに直し如此
活けらるべし

図のごとく陰陽を組葉を約まやかにとりまぜて出すよし
かく根の細きものハ何にかぎらず水際の強て高きハ悪し
其体おかしくなり

ぬけの花形ハひらき
たて余情深し左のごとく
水際ハ一寸引上るごとく生て
すこしたゝみ表裏きびしく組て
右をうけ入べし

かく一寸ハ上んて添へ引上げて生へし手おもくて茶つぼんなど
其外るの花ハ皆まゝ古をうつくしく入べし

海棠（カイダウ）
海紅トモ
上のるの実をうつくし

かくしゆかも
陰陽を樂源うけて入べし

おく梢節すくなるひすゑまるゝあしくらざれ
一すくと添ひくし上下として籠にてもしあしらいはなひきはは
とり合せゆへきほくくさへし

紅楊櫨（ヘニウツキ）
錦帯花トモ
海仙花トモ
十姉妹トモ
そこねうつぎとも

おく上下左右に花り合せて入へし
下は海棠萩などおくよりと取合て
きてることよし

櫻艸も二株ニ
組合なし

如此水際より乱れたるハ悪し
添ゆる木の枝と添て水際の枝と
添へて入るへし　次を見へし

ゑにしだ
金雀花なり
もくさんつゝじ
躑躅花
種数多し

二種ともにおなじ物ゆへまゝ入
さくら草もおなじ組へし

櫻艸
さくら草とも

おくたちんなるものと茎多く葉茂りて生ハ悪し葉を厚く
葉まく取に遣べしまこと際などハひそく葉厚く生へし
尚花のなくともかへし

芍薬(シヤクヤク)
花相トモ
牡丹トモ

尚風情のあそりさるハ菊ヶ囲く准へし
後の巻を見るへし

映山紅(きりしま)
仙臺萩

如是左右へとり亂にするハ悪し次の圖を見べし

如斯とりまめて一丈、あまりし竹の筒にて何れも入べし

あく五ろんとま そつたあろかる足ゆゑを忌し
事猶ださりハ添ふ添く折く添ふ見ゑて
法の大小なとしれ
ぬへし

美人艸（ヒシンサウ）
麗春花トモ
錦被花トモ

ぬき葉ゟげ枝かげよりつゆるも
よしまくるきつのおふなど
また高下ろ揉すきてし

如此ハ水際の葉混乱し すこし流るる葉を取りて
急し茎もつぼミつきるるて残し次の図を考ふべし
そめしゆり
百合ナリ
山丹トモ

いちはつ
紫羅傘ナリ
紫蝴蝶ーヒ
鳶尾草トモ
如是ハ葉四方一ひらき茎を

かく表裏混さるしきるハ悪し度々て生繕
あしらひもうくかきねはなにしてさすへし
体次をわくへし

射干（しやか）
胡蝶花ナリ
鳶尾花トモ

かく表裏とまぜし水際を
つゞめて生へし花体かこふそこそ
准てよし

ぜに葵などかく丈高く入るゝは悪し　枝茎くねりて
添ひかゝるく　風情縁し　扇子形ひきく入るへし
手ある籠などはおしして小体に入るればよくうつる
よみ取り　次の画しを見るへし

錦葵（ゼニアヲイ）
こあをひとも

かく枝葉表裏ふりかへ指くとのぞき
葉くゞりとくふうもちひ水際ひきく入るへし

萱艸
忘憂艸トモ

ふとゐ
莞
燈心草トモ
江蒲草トモ
ふとゐ つくも とも

ふとゐハきハざ傾がちにしてあくまでみだれぬをよしとするが
ごとく茎ばかりなる恙し 長短を花くさせ添物など
うへなどにちらしと出すべし 余情あり

澤瀉（オモダカ）
慈姑（クワヘ）トモ
剪刀艸トモ
燕尾艸

おくつまなるゑくぼに添あて出すべし 枝をいくも葉もと
一枚ハ茎ともにつて除き見るなし 但ふとゐ花うつりよしておれ
やさしくあしらひ又様様揃やうなる 傳あり
但高胄菜荳油松葉ハ針のやうなと用るハ拙し

この花撫子にて活し あしき茎あるをあまりあらはに見ゆる事
余情薄し 裏表なくして中は葉を重ぬべし
また水際の花葉は斜めなるべし 人の替をたてて活し
左の図とらべし

きんさい花
熊野菊

外此類も推して
見はからふべし

蜀葵（アフイ）
戎葵トモ
一丈紅トモ
単重紅白數多有

きぼうしゆ葉三枚迄では葉一本にてよし 但三枚ニ一本
までハ四本となれども苦しからず 次
凡きぼうしゆハ一株ニ葉
四枚まであり葉ハ一本ニ限るハ
なりまだ葉ころばぬのごとなり
是陰陽の備を以株の
様と知なり深の圖ととるべし

如是の杜若ハ一葉但机上
にて悪し 葉の葉もあしきを
見合てもちゆべし
組方初巻ニくはし

きぼうしゆ

杜若（カキツハタ）
燕子花ナリ
劇草トモ 馬藺トモ

二種とも花苔葉の鉢もむき
如是常の姿の圖にて
知べし

かく陰陽をわかし上下の様をつけていけべし
これ外生類仍まゝを図意なり
別体多くあり

擬宝珠（ギボウシュ）
玉簪ナリ　さうるいとちまたゐ
白鶴仙トモ　甚だ数多し
紫萼トモ
蒠花　此字きくよきをかるれる

柏 カシハ
大葉櫟トモ
山丹トモ
ひめゆり
水際
下草

花菖蒲も杜若のごとく葉をよせして組べし　かくハ一枚つゝ
伸くれして組たるハ悪し　右杜若より葉細くよわき故
高く立葉ハ土座の強きにて揃へて生べし　右の図を見て知べし

花菖蒲（ハナシヨウフ）
泥菖ナリ
沼あやめとも

かく葉を組まぬやうにすべし
別件ハ杜若ニ准ずべし

かく花ぶさ大ぶりにして茎ほそく葉の調ひ形よき
ものを押し伸して葉ハひかへし切つめて忍し
たの葉しをるゝへし

アヂサヰ
紫陽草
線繡花トモ
俗ニ七變化トモ

かく中ニ下をとりちらしばかり伸し葉よし
おく葉だくりのえだを添て葉の落ざる所を
補ふなよし

さくゆり 百合
鬼 おにゆり

この作上二輪ハよりくれども瓶を
乃さくるしく悪し
左の圖を見べし

圖のごとくんを瓶子乘るやうに出生を見立
趣ハきめて取りとる茎べしゆりの種数多し
何れもこの心得をふくむべし

馬盥轡留

馬盥ハ當家ニ種〻の傳説あれとも當流ニハもちひさる故ハ馬を
新鋳ニ造りし器物なりとも畜の嗅払ひたれハ貴人方ニ指請なく
就中ハ勿論常の会の席とハいへとも此上の具ニあらす不當用らむ
右ニ止むことなくとりもちゆることあらむとするならハ盥のみなる
ニ設置し其上ニ當家のとゝのへよきやうにまへくくわへし此外小刀とめ
くさり留砂利ともに盤留皆即生の一與なり仕様ハ三巻目の末
ニ出る故ニ錬ともにハ仕方并ニ出次第見て考へ有へし